

新年のご挨拶を申し上げます

投稿日: 2025年1月1日 (http: tokoroisao.jp)

はや日本人の平均寿命を越えましたが、今のところ健康に恵まれていますので、先般来いわゆる「終活」を心がけております。

しかし、その多くは一人で為しえず、身近な家族や志を同じくする知友たちの協力をえなければ出来ません。このホームページもその一つです。月刊『歴史研究』連載中の巻頭随想「いま伝えたいこと」も、今回からここに添付しますので、併せてご覧いただけただけなら幸いです。

2025/1/2 09:00

悠仁さまの「帝王学」 歴代天皇が修めた学問

THE SHANKEI SHIMBUN
研 究 局
藤原 那美

秋篠宮ご夫妻の長男、悠仁さまが今春から筑波大に進学される。18歳で成年皇族の仲間入りをした悠仁さまが、将来皇位に就く立場として修められる「帝王学」のあり方にも注目が集まっている。歴代天皇が古代より研鑽を深め、上皇さまや天皇陛下が向き合われた学びとは、どのようなものだったのか。皇室史の専門家で京都産業大名誉教授の所功氏に話を聞いた。

「大事にされてきた「儒教」の教え

「日本の歴史を振り返ると、天皇は多くの場合、政治的な権力を担うよりも、政治家を賞励する権威者だった。人々から信頼され、尊敬される有徳者として、歴代天皇は幼少から心を磨く努力を凝らせてこられた」

皇室における帝王学の意義を、所氏はそう語る。

所氏によると、歴代天皇の主な研鑽のよりどころとなったのは、孔子や孟子が為政者に説いた儒教的な理念だった。「歴代天皇は有能な儒学者から常時進講を受けてきた」という。

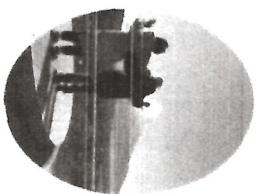
あけましておめでとうございます

昨年より原則的に年賀状を失礼しホームページにて新年のご挨拶を申し上げます。私（八十三歳）は健康に恵まれ、妻（京子）を少し介助しながら勉学と執筆を続けています。著書として下掲の二冊を纏め、また有志と共に『生誕百年の田中卓博士に学ぶ』（国民会館叢書）を出しました。ご覧いただけましたら幸いです

令和七年（二〇二五）乙巳 正月吉日

所

京
子
功



(方丈堂出版)

(藤原書店)

HP : tokoroisao.jp
E-mail : 12.tokoko.12@gmail.com

こうした学びへのご姿勢は、戦後の象徴天皇と皇太子にも受け継がれている。

所氏が注目するのは、皇太子同妃時代の上皇ご夫妻が東京御所で、陛下が学習院初等科に通われていることから、論語などの漢籍の進講を受けさせられていたことだ。

陛下の幼少期に、ご養育掛りを務めた故浜尾美氏の著書『浩宮さま 強く、たくましくとお育てした十年の記録』（PHP文庫）にも、陛下が初等科時代に「論語」の素読に取り組まれていたことを示す記述がある。

！ともに学ばれ

また、上皇さまは皇室の歴史に関する教育にも力を入れられてきた。

『新天皇家の自画像 記者会見全記録』（蘭部英一編、文春文庫）によると、昭和51年の記者会見で上皇さまは、学習院高等科2年生だった陛下に対するご教育について「天皇に関する歴史は学校などで学べないものです。それをこちらでやっていくことはしたい」と方向性を示された。

こうして始まった専門の研究者による歴代天皇の事績に関する講義は、親子で臨まれていたという。

所氏は「皇太子だった上皇さまは進講者に任せきりにするのではなく、自らも先祖の歴史を学ぶ機会にされていた。平成から令和に続く天皇の在り方を形作るうえで、東京御所内に設けられた、このような学びの機会が大きな役割を果たしているのではないかと語る。

！天皇に必要な道義や礼儀

若き日の陛下が、家庭内で受けた学びの機会を大事にされていたこと分かるエピソードがある。

昭和57年、学習院大卒業の節目で開かれた記者会見。当時22歳だった陛下

は、鎌倉時代末期の第95代花園天皇が譲位後、甥にあたる当時の皇太子に書き与えた「誠太子書（太子を誠（いまし）むるの書）」に触れ、「徳を積むためには学問をしなければならぬということを説いておられる」「その言葉にも非常に深い感銘を覚えます」と述べられた。

50歳の誕生日に際しての記者会見でも、再び花園天皇に言及されている。

「花園天皇の言われる『学問』とは、単に博学になるということだけではなく、人間として学ぶべき道義や礼儀をも含めての意味で使われた言葉です。私も、50歳になって改めて学ぶことの大切さを認識しています」

帝王学は「天皇陛下のお側で」

専門家「皇室の一体性」を提案

悠仁さまは今年、皇室の伝統行事「成年式」に臨まれる。令和の皇室は、次の世代の天皇への帝王学をどのように進めていくのか。令和ならではの皇室の課題とともに、専門家の提案を紹介する。

秋篠宮さまの長男、悠仁さまは今春、筑波大（茨城県つくば市）の生命環境学群生物学類に進学される。悠仁さまは次世代の天皇となるために「帝王学」をどのように修得されるのか。「そのためには父上だけでなく、伯父の天皇陛下が甥の悠仁さまに天皇としての心得を伝えられるような工夫も必要だ」と提案するのは、皇室史の専門家である京都産業大名誉教授の所功氏だ。令和の皇室に横たわる課題と、帝王学の具体的な在り方について、所氏の考えを聞いた。

！次代を担われる秋篠宮さまのお考え

令和になり、秋篠宮さまは皇位継承順位で1位、悠仁さまは2位の立場にいられた。

秋篠宮さまは昨年11月、59歳の誕生日に際しての記者会見で、悠仁さまへの期待について「一つ一つ自分が関わる仕事を大事に思って、取り組んでほしい」と述べられた。

また令和7年に数後80年の節目を迎えるにあたり、先の大戦や昭和史についての書籍を「機会を見つけて、読んで、それで理解を深めていく」ということも、私は大切なことだと思っております」と語り、悠仁さまにそうした書物を紹介する機会を持たれていることを明かされた。

一方で、上皇さまが陛下に授けられたような、仁徳の向上や歴代天皇の学びについては、方針を明言されていない。

この点に関して、所氏は「皇位は直系父子継承が理想とされ、皇太子は父帝を最高のお手本として学びながら育つことができた。しかし、令和の今日では、陛下と5歳しか変わらない弟の秋篠宮さまが皇嗣となられた。したがって悠仁さまが次の世代の皇位継承者として育てられるには、新しい工夫も必要だと思ふ」と指摘する。

■本家と分家の隔たりという課題

所氏が提案するのは、秋篠宮さまと悠仁さまがともに、陛下から天皇の心得と体験について、具体的に学ぶ機会をもたれることだという。

ただ、秋篠宮さまと悠仁さまが陛下のもとへ出向かれるには、少し難しい事情も存在する、と所氏はみている。それは、皇室内における「内廷」と「宮家」の立場の違いという問題だ。

令和元年以来、秋篠宮さまは皇位継承順位1位の「皇嗣」であり、秋篠宮家のご当主でもある。

「平成の31年間、今の陛下は『皇太子』であり、皇室の本家にあたる『内廷』の構成員だった。しかし、令和になり、次代を担う秋篠宮さまは、本家に合流せず、宮家という分家の当主に留まられた。この『内廷』と『宮家』、つまり本家と分家の違いが、悠仁さまへの帝王学を難しくしているか

もしれない」と所氏はいう。

実際、令和になり、皇室で歴代天皇の事績を学ぶ機会のスタイルが変化している。

所氏によると、明治以来、歴代天皇の崩御後一定年数ごとに神道式の「式年祭」が営まれている。

平成を振り返ると、その式年祭に先立ち、天皇、皇后だった上皇ご夫妻が、該当する天皇の事績について進講を受けられる際には、皇太子同妃だった今の両陛下も同じ場に陪席されていた。

ところが、令和になってからは、この進講が皇居の御所で行われた後、改めて赤坂御用地の秋篠宮邸で行われるようになり、一緒に皇室の歴史を学ばれる機会になっっていない。

■皇室一体で皇室史を学ばれる機会に

この変化について所氏は「いろいろな事情があるのかもしれない」と理解を示したうえで、新たな試みとして「皇室を構成する内廷と各宮家の成年男女皇族が、両陛下とともに皇室歴史を学ぶようにされたらよいのではないか」と提案する。

式年祭自体は宮中祭祀であり、皇室の「私的な行為」と解釈されている。

しかし、その前に行われる該当天皇の事績を学ばれる進講は、「皇室の全員が必修の好機とされるにふさわしい」というのが所氏の考えだ。

「年始に行われる『講書始の儀』のように、宮殿の公的な行事とされ、その大要を公表することも検討してほしい」と所氏は語る。

皇族数が減少する中、「現在の皇室が内廷も宮家も一体となって、皇室史を深く理解して、おのおのの役割に尽力する重要性を再認識される機会にもなることが望まれる」と話している。